

*碓氷瑞穂——秋田市・鴨宮眼鏡店

無い。

無い！

どこにも無い！

私の裸眼はせわしなく陳列棚の上を滑り、かつてあつたはずのフレームを必死に追い求めては途方に暮れている。

眼鏡が壊れた。それだけなら普通の災難だ。でも、あの眼鏡は礼士さんが褒めてくれたものだ。似合っていると言ってくれたものだ。

無残に踏み潰されてしまった。

レンズは粉々に砕け、フレームはまるで原型を留めていない。蘇らせることは、とても不可能だった。さながら……。

その先は言えない。言おうとすると、その度に心が砕けて言葉が出なくなってしまうのだ。見なくてはいけないものを、見たくないと言つて心が継ぎ目から粉々に割れてしまうのだ。

でも、それを見たところで。

礼士さんは……あの人は、またいつかみたく似合っていると言ってくれるのだろうか。

いや、その前に。

助かるのか。

私は魔女だ。

礼士さんは私のために命を投げうってくれた。

あれだけ生きること真つすぐで、どんな事件もその

頭脳で乗り越えてきた礼士さんが。

私は礼士さんの命を奪った。

私は魔女。

そう、私は魔女。

*

*

礼士さんがどうなるかは分からない。でも、どちらにせよ今の私ではいられない。礼士さんにべったりではいられない。猶予は終わったのだ。

でも、まだ私は礼士さんと歩んだ日々の面影を追い求めている。あの頃の碓氷瑞穂の面影を探している。

でも、それは許されない。

今、あの日見つけた眼鏡が見つからないように。

あの頃の幸せな碓氷瑞穂は、自分の運命から目を逸らしていた碓氷瑞穂は、もう帰らぬ人なのだ。彼女は、遠い時の流れの向こうへと消えたのだ。

「お客様」

私は肩をびくりと震わせて、声の主を探す。果たして、それは銀縁眼鏡をかけた初老の店主の声だった。

「過去にお買い求めになられた眼鏡なのですが、残念ながら生産が終了しております、既に在庫も品切れだとのことです」

そうだ。

過去には戻れない。一時一時、常に絶たれる時の中を歩むしかない。分かっていたことだ。分かり切っていたことだ。何度、時を戻れたらと思つたことか。何度、時を戻れたらと願つたことか。

「しかし、形は少々異なるものと同じ色のフレームが当店の倉庫に残っております。いかがでしょう、試着されてみますか？」

私はその言葉に、店主の手元に視線を落とした。

店主が持っていたのは、アンダーリムの楕円眼鏡だ。縁の色は、青池のような深い青。

鏡の中で、そっとかけてみる。前までの角縁眼鏡よりは柔らかい印象を受けるけど、雰囲気はそこまで変わらない。

私も、少しずつ変わる時が来たのだろうか。そう考えた矢先、ポケットの中でスマホのバイブが響いた。着信を見ると、釜田さんからだ。

「はい、確氷です」

『確氷か？ 俺だ、今どこにいる？』

えらく切羽詰まった声だ。私はどこか嫌な予感がした。私の人生が大きく動く前触れのように、体に震えが走る。

「眼鏡屋ですが、どうしました？」

『分かった、すぐ迎えに行く』